

木橋を越えて

産声がこだますると

麓にまどろむ風が ほほえんだ

綿雲が鳥海山にとまる

風と雲はその日から あかんぼのころをしとねにする
ひっそりこっそり棲みついた

三日目 白い腕があかんぼを抱き上げ小さな木橋を渡る
あかんぼは 笑った

よいしょ とつと 風と雲が四股を踏む

あかんぼは知らない

悲しみの深さを

流される涙の どんなに熱いかを

木橋をわたるときの 乾いた靴音を

よいしょ とつと 風と雲は汗をかく

あかんぼは少女になり 大人になった

つきまとう孤独は星となり 空を埋め 夜を彩った

遠い記憶 匏のしゅしゅ 木屑のああ匂い

たくさん獲れたあさり貝の 煮だった気配

しあわせのなかで不幸がぶらさがる

不幸のむこうで 目覚めたい夢

ほんとうの父母じやなかったことは たいした出来事じやない

人生の饒舌な波濤も 神様のおくりもの

川を浮き沈みするポリバケツのよう 淡々と

沈んだりはしない

海までがんばれよ

声が聞こえる

木々の間を風が彷徨い 雲は立ち止まる

ずうっとところが寒かったのは風が泣いたから

わたしの身代わりに泣いたから

空に懂れたわけは希望が見えたから

雲はなつかしい故郷の夕陽に 染まるから

おまえは金色の目をあげて

いつぴきの猫が 声をはりあげ鳴いていた
土砂降り雨が容赦しない
クロじやないか

ずぶ濡れた毛が潤んだ街灯に 光る

どうした 戻ってきたか
会いたかった

いやっ

あいつは天国へいったんだ

おまえ 迷ったか 捨てられたか

クロでなくてもいいんだ

いいんだ

どこにもやらないよ

腹 具合わるいのか 病院へいこう

どぶ水をいのちの引き換えにしたのか

獣医は痩せた尻へ注射針を立てる

胸が詰まったよ

おまえを抱きしめよう

わが魂を抱きしめるよう

ほんの一握りで幸せになれる

どこにも 心を寄せるすべもなく生きている

そんな思いが 雨のように滴る

ほんの一握りの温もりで 言葉が光をあびるなら

わたしの言葉が おまえに届くかい

奇跡は 出会うこと

たとえそれが猫という正体であろうとも

わたしにとっては ずぶ濡れた

たったひとつの いのちなんだよ

打ち明けよう

人間などと威張っているが 寂しい心を抱えている

深い森にさ迷う明日もあるのさ